

「意識」概念の心理学的再構成： コウモリではなく人間であるとはいかなることか

妻 藤 真 彦

「意識」が心理学に残された極めて大きな問題であるということが、これまで議論はなされていても、その意味するところが明確になってきたのは比較的最近であるように思われる。かなり長い間、知覚的防衛や闕下知覚を認めない心理学者が多かったのだが、その根拠は、定義上「意識的」でないような知覚はないということにあった (Erdelyi, 1985)。これらの「無意識的認識」が心理学上の現象として認められるようになったのは、実験法の改良 (e.g., Erdelyi, 1974) だけではなく、コンピュータによる「知的機能」の実行が部分的にせよ可能になったことが大きい。つまり、相当高度な「知的活動」を「無意識的 (というより非意識的)」な機械で行うことができるようになったために、むしろ「意識的」でないことの方が理論的に理解しやすくなったのである (妻藤, 1990: ただし、ここで人間の非意識的情報処理がノイマン型の「機械」に基づく主張しているのではない; 「意識」を持っていない「はず」の「思考機械」が原理的に可能であるということのみが、ここでのメタ理論に対して意味を持っている)。

機能主義的に理論を立てていく場合、「意識」という理論上の構成概念が最終的に必要なかどうか多分に疑わしい (妻藤, 1990)。そのため、しばしば (「人間の人間であること」を守るために) 「現象学」の立場からの批判が、機能主義的メタ理論に対して行われる。そして分析哲学からは、そのような「現象」の意味づけが曖昧であるとして、またそれへの批判が行われる (e.g., Dennett, 1988)。しかし、哲学上の論争

に直接紛れ込むよりも、むしろこのような論争の性質を心理学的に分析することから、何らかのアイデアを得ることができるかもしれない。本稿では、哲学上のいくつかの論争点を、心理学的に取り込んでしまえるようなフレームについて試論として検討を行う。

主観によってのみ到達可能な「現象」?

まず Dennett (1988) が, qualia を否定するために行った議論と Nagel (1979, Chap.12) の「主観」に関する議論を対比してみることに意義があると思われる。

Nagel (1979, Chap.12) は、人間についての研究が、かならずどこかで「決定的に主観的」であるようなことがらと関わってしまい、そこでいきづまりを迎える主張している。彼は、これを例証するために、次のような議論を進めた。まず、「コウモリであるとはどのようなことであるか」を、これとは異なる認識様式を持つ人間が、理解できるかどうかまったく疑わしいということを挙げる。コウモリは視覚よりもむしろ超音波によるレーダーに頼って飛行する (このことは客観的に研究できる)。しかし、そのような「装置」を持たない人間は、コウモリとして生きることが (主観的に) どのようなことであるか、言い換えると「コウモリであるとは、そのようであるようななにごとか」を想像することができない。そして結局、人間の場合も、他人について「その人であるとは、そのようであるようななにごとか」は、自分の (固有の、かつ他人には直接伝えられない) 「なにごとか」に基づいて、類推することしかできない。

ここでの論証は、次のような心理学上の議論とは無関係に進めることができる。つまり、精神分析で言う無意識やMarcel (1988) の非意識などとの関連で、「本人」にも認識できない抑圧された感情や情報あるいはプロセスがあるのだから、自分でも自分のことを知りつくすことはできない；したがって「私がわたしであること」は、主観の問題ではないという反論を行う人があるかもしれない。しかし、Nagelの主張はそのような問題ではなく、自分に「直接」知られていること、自分が生きているとはそのように「意識」されていることであるようななにごとかに関わっており、その原因が無意識的メカニズムであろうとなかろうと、議論の内容が変化することはない。

一方、Dennett (1988) は、固有で、言葉ではいいようのない、かつ私的で、「意識」において直接に捉えられる qualia という概念を批判している。彼はまず固有性について、幾つかの思考実験によって矛盾を導こうとする。重要なものを一つ挙げると、朝起きたときもし空の色がいつもと違う色に見えたなら、そのとき何が起こったと言い得るか、というものである。実は可能性はいくつかある。だれか狂った科学者が、夜の中に私の神経の配線をいじったのかもしれないが、そのとき感覚系の配線を変えたのか、記憶系を変えたのか「本人」には判定できない。つまり、昨日まで空はこの今見ている色とは違っていた、という記憶を（夜の中に）与えられていたということもあり得る。いま見えている「色」を、「昨日までの空の色」と比較すれば、当然奇妙な印象を持つであろう。言い換えると、もし qualia があるとしても、それは本人にとって、「自分にしか」到達できない固有の特徴をもつとはかならずしもいえない。記憶が正常であるという確信がないかぎり本人にとっても、「空の色は（言葉では表現できないが）今私が見ているこの色だ」とはいえない。そして、記憶が正常であるかどうかを自分では決定することができない。これを判定するためには、なんらかの客観的リファレンスが必要だからである（つまり、もしこれが「意識」によって「直接」にしかとらえられないことがらの固有性に関わるものであ

れば、定義によってこのことは客観的には決定不能であり、またそのことによって、本人にとっても固有のものであるかどうか自体が決定できなくなる）。

一般に考えられているのは、何事かが意識されたとき、それに対する判断あるいは好みなどが決定されるということであろう。つまり qualia は固有のものであって、その人の好み（など）が変化するとしたら「それ」に対する「反応」が変るのである。Dennettはこのことを、味の鑑定専門家が「自分の会社のコーヒーの味は変わっていないのだが、自分の好みが前とちがってしまったので、うまいと思えなくなった」という事例を挙げて議論している。明らかにこの専門家の何が変わったのか論争が可能であるけれども、「本人の主観」はそれを決定できない。

Dennett (1988) は Nagel (1979, Chap.12) の主張と関連させた考察を行っていない。しかしこのような議論を認めることによって、「私であるとはどのようなことであるか」に関連して何が生じるかを考えてみる必要がある。結局「私が私であること（単に内面世界ではなく、物理世界の知覚も含んでそれより広い意味である）というなにごとかが、それ自体は「私の現象」として確固としてあるということ認めないことになる。本人自身が経験的に自身を変化させていく（記憶あるいは知識システムが変化する）につれて、意識されていること、しかもその本人が「(Nagel, 1979, 式の言い方をすれば) その人であるとは、そのようであるなにごとか」がもし変化しても、そのことを正に本人が認識できないという可能性を認めることである。

もしある日私が目覚めたらコウモリになっていたとしても、私の「意識」のありかたが以前からそのようであったという記憶を伴って変身が起こるのであれば、私は、人間であるとはこのようなことであったということを知らないために、自分が変わってしまったのを認識できない。これは極端な話であるが、一般的に人間の記憶（エピソード記憶）は現在の時点で意味を持ち（Neisser, 1981）また、現在の時点で自身を物語るためにしばしば変化する（ストーリーを一貫させるため

に、あるいは「物語」とするために、無意識的作話が行われてエピソードの中に取り込まれることが発見されている：e.g., Linton, 1975 ; Neisser, 1982, Chap.4 and other chapters)。例えば、私にとって生きていくことはずっと「このようであった」と思っている、現在の「私」にとって意味のあるように記憶の細部が（時には重要な部分が）再構造化されるのであれば、その「思い込み」が正しいかどうかは判らない。「私」の固有のありようは一貫しているという直感は強固なものであるが、このような研究から、「私の同一性」とは「現在」と切り放しては意味を持たないと結論せざるをえない（ただし、このことは通常の生活を維持するために、「私の同一性」の「意識」が（機能的に）保たれる必要があるということとはまた別の問題である：妻藤, 1991）。

「言いようのない」という性質についても同様にして否定される。Dennett (1988) は「意識」される事柄が情報的に豊かでありすぎること、また他者との間のリファレンスが明確でないことが、見かけ上の「言いようのなさ」を作り出していると結論した。例えばある知覚内容を他者に伝えようとすれば、もし自分の特徴検出のプロフィールがある人と一致していることが判っており、かつそのレベルの情報処理方式について自分で判っており、そしてそのレベルの用語で語る事ができれば、「伝達可能」だと主張している（ただしここでいう特徴検出とは心理学で言うものとは異なり、そのような「意味」での、ある「機能」という意味にとるべきであろう）。ただし、もちろんこれを実現するのは事実上不可能である。しかし、これが正しいなら、またこのレベルについての「研究」によって、それを「語る事」ができるようになれば原理的には不可能ではない。ただ、その場合でも豊かすぎる情報（量）のために、完全な「伝達」が現実的であるかどうかは別である。このような意味において「言いようのない」という「性質」は相対的なものであって、「それ」を特定する決定的性質ではない。ランダムな形状の縁になるように破った紙は、「直接」突き合わせれば、もともと一枚の紙であったかどうか判定で

きるが、その破れ目を（突合せができる程度に）完璧に言葉で「伝達」することはできない。Dennett は「直接的」にしか知られない「言いようのなさ」とはこの破れた紙の場合と同じ意味だと結論している。

抽象化のレベル

結局、彼は機能主義的な解決をすることで（ある意味で）「科学」の問題に還元した。しかしながら、まだ重要な問題が残されており、しかもそのためにこの「言いようのない現象」についても、さらに考察を進める必要があると思われる。もし単に「破れた紙の突き合わせ」と同等の問題であるのなら、現在のパターン認識を行う人工知能によって相当程度に「突き合わせ」自体は可能なのであるから、例えば私的な出来事である知覚を、改良型人工知能を補助手段として「伝達」することは、原理的には可能である。しかし抽象的議論を行っている限りでは、Dennettの議論は説得力を持つように思われるが、それでもまだ、次に論ずるように Nagel (1979, Chap.12) のいう「なにごとか」が消え去ってはいないという可能性を否定できない。

Dennett の議論は哲学上の概念規定を批判している点では、確かにそれらが不十分であることを論証したといえよう。しかし問題は我々の直感を与える「なにごとか」についての説明ないし理論ではないということにある。つまり彼のように「問題」を規定した場合、「意識」はなんら理論的必然性をもたないことになるからである。機能主義的にとらえようとするとき、理論的には、すべての「機能」を非意識的情報処理として実行できる可能性が強い。少なくとも、現時点で提案されている理論的モデルについてはそのように見ることができる。というのは、「意識」という用語を用いても、それをメタ認知、注意、モニタリング、自己組織化などの用語で置き換えが可能だからである。あるいはむしろ機能的に置き換えようとしているという方が正確であるかもしれない（妻藤, 1990）。

このことによって、「私」が今見ている、あるいは「気づいている」という「そのこと」が、どのようなこ

となのかは理論の視野に入っていない。システム自身をモニターできる「機械」が、仮にDennettの言うように我々と同等の特徴検出プロフィールを持っていたとしても、この「機械」が「意識」を持っているかどうかは、(理論的になんの判定方法も明示されていないために)決定しようがない。互いに「意識」を持っているということが確信されているときに限り、「そのこと」が、Dennettのいう意味で、「原理的には伝達可能」なのである。この言明は、言い替えるなら同等の「意識」を持つための必要条件を特定しているのであって、十分条件ではない。

「認識」と「認識の様体」

これまでの考察から次のような提案を行いたい。つまり、ある事柄を知っているあるいは認識しているということと、それを「どのように」知っている、あるいは認識しているのかが区別されるべきである。このことを「認識様体」という用語で言及する。

盲視 (blind sight:e.g., Weiskrantz, 1988) といわれる現象は、脳損傷 (17野) の患者がある刺激を「見えない」と主張しているにも拘らず、その刺激に対してかなり正確な反応ができるというものである。しかもある程度訓練をつむと、何かそのような感じ (丸いものなど) を持つようになるが、それでも「見えない」ことには変りない。これに関してNatsoulas (1982) は、その「見えないが分かっている」という現象の機能的意味に注目した。彼は、これまでに発表された幾つかの仮説をひとつずつ検討して結局全て否定してしまう。そのように判っていることとは、感覚的性質を持たない純粋な知覚ではなく、具体的な知覚的リフレックスでもなく、(視覚世界を伴わない) 視覚野のみの知覚あるいは単なる認知的反応でもない。彼の結論は、通常の知覚的意識とは、その人の視点からの認知なのだということである。そして、盲視における一種の知覚はそのような視点を伴わない認知だとされる。

このNatsoulasの主張は、ここで提案する認識の「様体」の区別を部分的に含んでいる。視知覚における「私の視点」は次のような認識の「在り方」の中に

必然的に含まれる。つまり、知覚に限らず「意識」とは、「私」の、固有で、しかも「言いようがなく」、かつ私的で直接的、というある意味での「確信」に対応する一種の、脳内の、あるいは(機能的に定義される) 認知装置の状態あるいはパターンをバックグラウンドとして(明確に「意識」の焦点にあるのではなく、ゲシュタルト心理学で言うところの「地」の上に) 成立した、ある認識の在り方である。これは、例えば、ある模様が一面についている紙の上に何らかの絵を張り付けるというようなものではない。ここでいうバックグラウンドを(機能的)「前提」として成立する「様体」である。例えば、一種の人工知能が、そこにあるのは三角形だという認識をもっていたとする。しかし認識内容はそれと同じであっても、それが知られるときの「在り方」が人間と同一であるとは限らない。これは、単に見方が違うとか認識の仕方が違うというのではなく、同じ見方をしており、認識の(機能的) 視点も同一であって、さらに認識内容も同一であるようなときに、私にとって直接知られている在り方とは等しくないかもしれないということである。このような「機能的」には同じである認識についての「在り方」の違いを仮定し、それを「様体」と呼ぶ(ニュアンスとしてappearanceに近いものとする)。

思考実験

この概念を説明するために、一種の仮説を述べる。ただしこれは心理学上の理論として提案するのではない。異なる「様体」の説明を明確にするために、「そのようなことが、少なくとも、あるシステムを仮定すれば生ずるといえる」ことを議論するための、思考実験の道具である。したがって、そのような意味で同等な理論(以下で述べる「理論」は十分に抽象的であり、これとその意味で同等な理論は無数にある)であればどのようなものでもよい。

トールマンが提案した認知地図は、以上のような議論が正しいとすると、認知の在り方としては通常の「意識」とはかけ離れたものになる。この地図の中には、自分が歩いている場所が自分自身を客観化して指

定されている。それは、「私が知覚するとは、そのようであるなにごとか」とは異なる「様体」である。ただし、メタレベル、つまり「そのことを認識している視点」は「わたしのもの」であり、これは「意識」の「様体」を維持している。変ってしまったのは、そこで「見られているわたし」の「様体」である。これは（少なくとも「意識」をもつようになってしまった人間には）特殊な「意識の在り方」と仮定する（後で述べるように、「意識様体」は、認識が「意識的」であることの十分条件であって、必要条件ではないことに注意されたい）。現在の人工知能の表現システムは通常の「意識」とは異なる認識の「様体」をもっており、それは以下で述べるように「見られているわたし」の「様体」に近い（あるいはある程度発達した脳をもつ動物のうち比較的高等ではないものに生ずるのはこのような認識であるかもしれない：ネズミは廻り道問題を解くことができる）。

現在の人工知能における知識表現は、スキーマであれその他の方式であれ記号計算主義に基づくものは（e.g., see 戸田, 阿部, 桃内, & 住, 1986）何らかの形式での検索により、現時点で必要な「情報」がワーキングエリアにセットされる。そしてモニタリング、つまり機能的には「意識」に近いようなメタシステムを持つものも、そこでの「表現」は「内容」を指定する記号列であって、もしさらにそれをモニターするもう一段階上のメタシステムがあるなら、それを読みだすことができる。しかしもとのレベルの内容と「様体」が変化することはない。どのようなモニタリングシステムであっても、その点で原理的に違いはない。一方で、「意識」の認識「様体」とは、そのようにもう一度メタ認識を行えば、そのもとのそれ自体はもはや「意識様体」を持つことはない。その時「意識様体」を持つのはそれより一段階メタにあたるもののみになる。この点が基本的に異なる。また（少なくとも現在の）並列分散処理の場合でも最終的に結晶化したパターンが利用されるので（e.g., Rumelhart, MacClelland, & PDP research group, 1986）、それをさらにメタシステムが利用したとしても「様体」自体が変るわけ

はない。当然上位システムがそれにアクセスすることによって、もとのパターンが変化するように設計することはできるが、それは「内容」が変わるのであって「様体」の変化ではない。このような意味で Yates (1985) の世界モデル表現あるいは Johnson-Laird (1983; 1989) のメンタルモデルのオペレーティングシステムとしての「意識」も、ここでいう「様体」をみたしていない。

ただしこのような（現在の人工知能的）在り方も、人間の場合には、通常の「意識」の（あるいは認識の）在り方を經由して発生するであろう。つまり一時的に「意識的」認識の「様体」をメタレベルでの認識に移すことによって可能になる（いま自分はそのようにイメージを操作しているというメタ認知）。これには、示唆の根拠を与えることができる。Holland, Holyoak, Nisbett, and Thagard (1986) は、大学物理学科の学生の半数近くが、（ニュートン力学を勉強したはずなのに）日常的な事例を説明させると、どうしても力を加加速度ではなく速度と対応させてしまうために混乱するという実験結果をまとめている。また、人間関係が関わってくる時の原因帰属について心理学の講義を受けて理解していても、やはり相当数の学生は、具体的な日常の出来事を解釈する課題で、その理論を使えないというデータも同一の現象として論じている（特定の「行動」は、大半が状況依存的であるのに、そのような「行動」を行ったのは、行為者の性格が原因だと考えてしまう）。彼らは、帰納的に得られた極めて強固な自然概念が、その原因であると結論し、また十分な実験的証拠を網羅している。また、相当程度の教育を受けているにも拘らず、そのような自然概念を変更できない理由としては、帰納的な認識が人間の基本的な認識様式であるからということになる。

もし、そうだとするならば、認識の仕方がそのようなものであることが、「意識」の認識の「様体」を決定しているという示唆が得られる。すでに述べたように、認知地図のような、（比較的）単純な場合でも必要であったように、客観的やり方で「意識的」に考えるということは、自分自身の「意識的」認識の通常の

「様体」をメタレベルに移行させ、それによって具体的レベルでは人工知能的認識の「様体」をとるようにしなければならないからである。自然な認識の在り方とは、「私」が生きている世界（私が私であるとは、そのようなことであるような、なにごとか）の構造的統一性を崩さないように、出来事を「解釈」することによって、それはそのまま「意識的」にとらえられる。つまり、「意識」の認識「様体」と親和性の高い「情報処理経過」をたどる。一方、個々の出来事をそのように「解釈」するのではなく、「私」の直接経験とは離れたところから与えられた「法則、原理あるいは理論」を使って、「出来事」ではなく「事実」を「説明」すること、これは不自然であって、訓練によってしか達成できない。（ここで用いている「解釈と説明、出来事と事実」はそれぞれ同等ではないものとして使用している。日常的には「事実」という「言葉」も用いられるが、そのときに、実際に行われている判断が、ここで言う意味での「事実」の「説明」であるとは限らない；むしろそのような例は少ないはずである。）もし最終的認識が前者の場合と同じであったとしても、その「情報処理の経過」は「意識」の認識「様体」と親和性が低く、またその認識結果自体訓練によってしか後者の認識の「様体」を達成できないとすれば、認知地図の場合は生活上の必要によって訓練されると考えられる（その訓練の経過自体は、当然帰納的であろうけれども）。したがって、新しい町でなかなか地理を覚えられない人もおり、また同様に、科学者や哲学者であっても、自分の専門領域を「専門的」に考えるとき以外は、日常的判断について素人と変らないであろう（e.g., Kahneman & Tversky, 1973）。

「論争」の解釈

もしそのように「意識」をとらえてよいとするなら、メタ認知やモニタリングについての、（その情報処理と行動に関わる意味での）機能的モデルは「意識」の理論ではないことになる。（現在の）人工知能的認識「様体」をとるメタ認知やモニタリングは、当然あり得るのだが、そのようにして達成された認識は、「人

間としてあるとは、そのようなことであるなにごとか」という性質を持たない。機能としてはそれと等価であって、かつ（おそらくは）認識の内容も同じであっても、その「様体」が異なるような「なにごとか」が必要である。これは単に、固有的であるとか、言いようがないなどの「情報」をメタ認知の内容の中に付け加えることとは異なる。「それがそのようである」とは、「固有であって言いようがなく私的で直接的である」としか受け取ることができないことを意味する。さらに、重要なのは、そのことは、考えることによって得られるのではなく、注意を向けたときに判るのでもない。そのこと自体は当然「意識」されないのであって、認識していること自体が、前提としてそのことに「包まれて」いなければならない。そのために、固有であるとか言いようがないなどという言明は、哲学者が「説明」あるいは「記述」しようとしたときに、「考え出す」必要があった。

そしてそのように主張された時、「意識」の通常の認識「様体」で理解しようとすれば「直感的（超越的?）」に納得できてしまう（そのように言われてみれば、そのようにしか「言いよう」がない）。つまり、「意識様体」は認識が「意識的」であるための十分条件をなしている。そして、この「様体」を「客観的」に考察すれば、論拠がない、あるいは「客観的」には間違っているとしか言いようがない（認識されている内容、あるいはそれを利用して起こる行動などは、人工知能の場合と原理的にどこが違うのか?）。つまり「意識様体」は必要条件ではないために「原理的」考察からはみ出してしまう。言い換えると、自分自身について客観的に考えようとすれば、「意識様体」はメタ認知の側に移行するため、対象レベルの「意識」は人工知能的「認識様体」をもつことになる；この意味において「意識様体」は十分条件であるが必要条件ではない（このメタ認知をも対象化して「その全体はどのようなものか」と考えようとしても、また問題の「様体」は異なるレベルへ逃げてしまうため、「考える」ことを行う以上これを繰返しても必要条件としての性質を持つことはない）。Dennett（1988）も述べているよ

うに、この種の論争は何度も繰り返されており、どちらの側も、それぞれ相手が決定的だと考えている「論証」あるいは「記述」によっては説得されつくすことはなかった。本稿の議論が「説得的」であるかどうかは、ここでは当然決定できない。しかし、少なくともこの類の論争に決着がつかず、常に（新しい容器に古い酒を入れて）むしかえされる理由として、直感と論理が対立してしまうということがあるのだとすれば、解決の方法として、そのどちらとも異なる形式での「モデル」を作り出すことしか解決の方法はないであろう。ここで行った思考実験は、そのような「モデル」を作る（第一近似としての）試みである。

「現象」の記述レベル

以上の議論は哲学上の論争を（心理学の内部の問題として）解決する可能性を探ただけであって、心理学的あるいは認知科学的には、これだけではあまり意味がない。異なる「様体」を記述する具体的なメタ理論、あるいは少なくとも何らかの記述フレームが与えられなければならない。以下では、これについての最小限必要なアイディアに到達するために、現時点で可能な範囲での指摘を行う。

現在の人工知能が「意識」を持たないとして、さらにそのような線で改良された人工知能が、人間の視覚と同じ「機能」を持つようになったものとしよう。ただしその「機能」は、行動と思考との関連で同等の機能を持つということであって、認識の「様体」は「意識」とは異なると仮定する。（同等の「機能」を完全に実現するには結局人間と「同じ」になる必要があるかもしれないという議論は可能であるが、ここでは思考実験として、そのようなものが可能であるとしたときに何が考えられるかを問題にしている。またこれまでの議論から、少なくとも「外から」は区別できないが、「様体」は異なるような認識を行う機械を考えるのは不合理ではない。）

そのような人工知能には、単に三角形を認識するだけであるような簡単なものであったとしても、Palmer (1975)などが提案したような知識ネットワークだけで

は不十分である。つまり前述の Natsoulas (1982) が仮定したような、自分の視点から見たときの表現を行うシステムが付加されねばならない（これ自体は難しいことではない）。このとき、このような人工知能をもつロボットの視覚にかかわる日常活動は人間と全く区別はつかないのであるが、「そのロボットであるとは、そのようなことであるなにごとか」を、我々は想像することができない（コウモリの場合との違いは「機能的」には同一だという点にある）。ただし、ここでいう想像不可能とは、具体的にそれがどのようなことであるかということである。言い換えると、直接そのようなレベルで理論を作ることは、たしかに Nagel (1979, Chap.12) が主張するように不可能だとせざるをえないであろう。（認知地図や科学者の理論的考察の場合であっても、メタ認知のレベルでは「意識」の「様体」は変わっておらず、対象レベルでもそのメタレベルの「様体」を経由してしか知り得ない。）しかし、同様に、量子力学の理論が対象とする何ごとかも人間の想像を越えている。例えば光子の運動は、絶対値の2乗をとると粒子として観測される確率を与えるような、複素数で表現される波として記述される。そして観測しなければ波として2個のスリットを同時に通過するが、観測をおこなえば粒子としてどちらかのスリットのところでしか発見されない。このようなものの描像をどのように描けばよいのか、標準解釈以外にいくつかの異説があり、そのうちのひとつである統計的解釈以外はどれも人間の直感に直接訴えるようなものではない (e.g., Davies, & Brown, 1986)。しかもこの統計的解釈とは、理論が与えているのは単に統計結果を記述するに過ぎないというもので、この理論によって物理的对象自体が認識されてはいないという主張である。これに対して「意識」の場合には逆であって、「そのようではないこと」が想像不可能であるために、「そのこと」を特徴づける理論の立脚点を見いだすのが難しい。もし「そのようではないこと」が想像可能であれば、「そのようであること」との違いの記述に基づく理論を展開するのはさほど難しいことではない。しかし、問題としては、この心理学上の難点は量子力

学のそれと同質のものを含んでおり、むしろ最大の違いは物理学の場合は古典理論とのズレが、このような（ある意味で）直感的にはわけのわからない理論へと導いたところにある。心理学の場合には、そのようなことを期待できない。

しかし、少なくとも、想像不可能性に基づく困難があるとしても、量子力学のように何らかの形での理論を作ることができる場合があるとは言い得る。心理学の場合、「意識」の性質を「何かそれとは異なること」と比べるできないのが問題なのだが、もしその「意識」自体の内側で、その認識の「様体」に直接関係する何らかのことがらで、その「様体」について「程度」を持つのであれば、かなり話は異なってくる。つまり、「意識的」であることのレベルの違い（単に明瞭性の違いではなく）を見いだすことができれば、（それが主観的にどのようなことであるかを具体的に記述するのではなく）、そのことの統計的振舞いなどを理論化できる可能性は高い。おそらく有望な方法としては、認知地図あるいは何らかの高度に抽象論理的あるいは科学の理論の意識的応用などにおける「意識」の在り方と、具体的な内容としてはそれらと同じことがらについて日常的に考えるときとの違いを示せるような、「機能」ではなく「意識」の在り方の測度を開発することであろう。例えば、確信のありかた、信念などについて、同じことを同じ程度に信じていても、それがどのようにあるか（固有であって、その詳細な中身は言いようがなく、私的で、かつ直接的に自分に知られているとしか、本人には言いようがないかどうか）を測定する方法である。もし、被験者が確信の根拠を述べたとしても、さらにその根拠を追及していけば、どこかで「言いようのない」ところに行き着く場合がある。このとき無批判に「そうとしか思えない」ことがらについて、その内容は豊かだが「言いようがない」ようなことがら（つまり「現象体験」がその確信を「直接」与えたような場合）をどの程度含んでいるかが、ひとつの基準になるかもしれない。この基準を完全に満たしたとき、それが「もっとも意識的な様体」であると仮定する。ただし、「意識的」にすべて

の根拠を把握して考えている場合には、「意識の様体」がメタ認知の側に移行していると仮定していることに注意されたい。つまり、そのような場合でも全体としての「意識」の存在は変化しているわけではない。たいていの場合、表立って質問されてしまうと（あるいは、そうでなくとも反省的に考えてしまうならば）、自分自身を対象化してしまい、「意識様体」がメタレベルに移行してしまうので、この「様体」を「測定」することができない。またすでに述べてきたように、メタレベルでの「様体」を直接測定しようとしても、「意識」の基本態はさらに上位のレベルに移行してしまうので結局測定することはできない。そこで、上述のように、メタレベルからの「説明」ができないようなケースを抽出しなければならない。ここでの指摘は、対象レベルでの「意識様体」の変化を（もしそのようなことがあるのなら）あるレベルで検出できる可能性があることを述べたものである。

結論と要約

「意識」を「現象体験」の側から考えようとする立場と、「機能」の側からモデル化しようとする立場の対立は、単に科学の枠内の問題ではなく広い意味での人間観までも関与してしまうようなことがらとして、論争が続いてきた。本稿では、そのような対立の内容を考察した上で、その原因として、異なる視点から見るときに全く異なるものに見えてしまうような性質を「意識」がもっているという仮説が提案された。つまり、情報としてあるいは認識として、内容的に、また機能的には同一であるにも拘らず、その認識の「様体（appearance）」が異なるものがあり、「意識」は（現在の）人工知能の認識とは異なる「様体」をもっている（この「様体」とは、固有性、言いようのなさ、私性、そして直接性をバックグラウンドとして成立するような、ある主観的性質と定義された）。認識が「意識的」であるためには、この性質が（必要条件ではなく）十分条件であるために、「体験」の側から見れば「人間であるとはそのようであるようななにごとか」を無視できなくなり、一方客観的観点、特に機能主義的立

場から考察を行えば、一般的な意味での知識表現の一形式としてとらえる他はなくなってしまう（必要条件ではないというのは、客観的態度で自分自身を対象化しているようなばあい、この「意識様体」がメタ認知のレベルに移行してしまうため、対象レベルを「意識すること」はこの「様体」もたなくなるからである）。この仮説を用いることによって、少なくとも、（機能主義と全く同等ではないが）客観的立場を維持した上で、「現象体験」に関する直感を矛盾なく取り込めると結論された。作業仮説としてこれを認めることで、心理学の側ではこの論争自体は回避して理論を考えることができる。さらに心理学上のデータがこの仮説によって意味づけられるような「測定」について、予備的な考察も行われた。

引用文献

- Davies, P.C., & Brown, J.R. (1986) *The ghost in the atom*. Cambridge : Cambridge University Press. 和訳「量子と混沌」出口修至訳 地人選書 1987.
- Dennett, D.C. (1988) Quining qualia. In A.J. Marcel & E. Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp. 42–77). Oxford : Oxford University Press.
- Erdelyi, M.H. (1974) A new look at the New Look: Perceptual defence and vigilance. *Psychological Review*, 81, 1–25.
- Erdelyi, M.H. (1985) *Psychoanalysis : Freud's cognitive Psychology*. New York : Freeman and Company.
- Holland, J.H., Holyoak, K.J., Nisbett, R.E., & Thagard, P.R. (1986) *Induction : Processes of inference, learning, and discovery*. Cambridge : The MIT Press. 和訳「インダクション」市川伸一他訳 新曜社 1991.
- Johnson-Laird, P.N. (1983) *Mental models*. Cambridge : Cambridge University Press. 和訳「メンタルモデル : 言語・推論・意識の認知科学」海保博之監修 A I U E O 訳 産業図書 1988.
- Kahneman, D., & Tversky, A. (1973) On the psychology of prediction. *Psychological Review*, 80, 237–251.
- Linton, M. (1975) Memory for real-world events. In D.A. Norman, D.H. Rumelhart, & the LNR research group (Eds), *Explorations in cognition* (pp. 376–404). San Francisco : W.H. Freeman and Company.
- Marcel, A.J. (1988) Phenomenal experience and functionalism. In A.J. Marcel & E. Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp. 42–77). Oxford : Oxford University Press.
- Natsoulas, T. (1982) Conscious perception and the paradox of “blind sight”. In G. Underwood (Ed), *Aspects of consciousness Vol. 3 : Awareness and self awareness* (pp. 79–110). London : Academic Press.
- Nagel, T. (1979) *Mortal Questions*. Cambridge : Cambridge University Press. 和訳「コウモリであるとはどのようなことか」永井均訳 頤草書房 1989.
- Neisser, U. (1981) John Dean's memory : A case study. *Cognition*, 9, 1–22.
- Neisser, U. (1982) *Memory observed : Remembering in natural contexts*. San Francisco and Oxford : W.H. Freeman and Company.
- Palmer, S.E. (1975) Visual perception and world knowledge : Notes on a model of sensory-cognitive interaction. In D.A. Norman, D.H. Rumelhart, & the LNR research group (Eds), *Explorations in cognition* (pp. 279–307). San Francisco : W.H. Freeman and Company.
- Rumelhart, D.E., McClelland, J.L., & the PDP research group. (1986) *Parallel distributed processing : Explorations in the microstructure of cognition, Vol. 1 : Foundations*. Cambridge : The MIT Press.

妻藤真彦 (1990) 認知心理学における「意識」と「測定」 In 大阪市立大学文学部心理学教室四十年のあゆみ (pp. 564-576). 大阪市立大学文学部心理学教室.

妻藤真彦 (1991) 認知理論における「自己像」の機能的役割. 美作女子大学・同短大部紀要, 36, 1-10.

戸田正直, 阿部純一, 桃内佳雄, & 住彰文 (1986) 認知科学入門: 「知」の構造へのアプローチ. サイエンス社.

Weiskrantz, L. (1988) Some contributions of neuropsychology of vision and memory to the problem of consciousness. In A.J.Marcel & E.Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp.183-199). Oxford: Oxford University Press.

Yates, J. (1985) The content of awareness is a model of the world. *Psychological Review*, 92, 249-284.

(1991年12月2日受理)